作って、あそぼ！

# でんでん太鼓

増田 良子

推奨年齢： 制限は特になし

環境設定： 机と椅子

## 活動の概要

ガムテープの芯に上質紙を貼って、デンデンといい音のする太鼓を作る。できあがった太鼓で音遊びを楽しむ。

## ねらい

・廃材を利用して手作りの楽器作りを楽しむ。

・どうすればもっといい音が出るかなど、創意工夫を楽しむ。

## 準備物

- 折り紙（和紙）
- 割りばし
- ビーズ
- 細めの凧糸
- のり
- ガムテープの芯
- 上質紙 （丸を印刷しておく）
- フエルトペン
- 水とそれを入れる小さな皿

## プログラム開発の背景

廃品を利用したでんでん太鼓であるが驚くようないい音をする。自分で好きな絵を描く楽しみと出来上がった太鼓がいい音を出す喜びがある。

▶気付き

以前は、スーパーのポリ袋で作っていたが紙のほうが破れにくくいい音がする。紙を湿らせて貼ることでぴんとしっかり張れていい音がするのである。

## 展開内容 （所要時間約60分）

1. 完成見本を楽しく見せる。
2. ガムテープの芯に穴を開け、割りばしを通す。凧糸をつけて出す。
3. 上質紙を丸く切り取り好きな絵を描く。上質紙に切込みを入れて湿らせてからガムテープの芯に貼り付ける。
4. ガムテープの芯のまわりに和紙折り紙を貼る。
5. 最後にビーズをつける。
6. 音を出してあそぶ。
   友だちの音を聞く。みんなで音を出して楽しむ。

▶展開のヒント

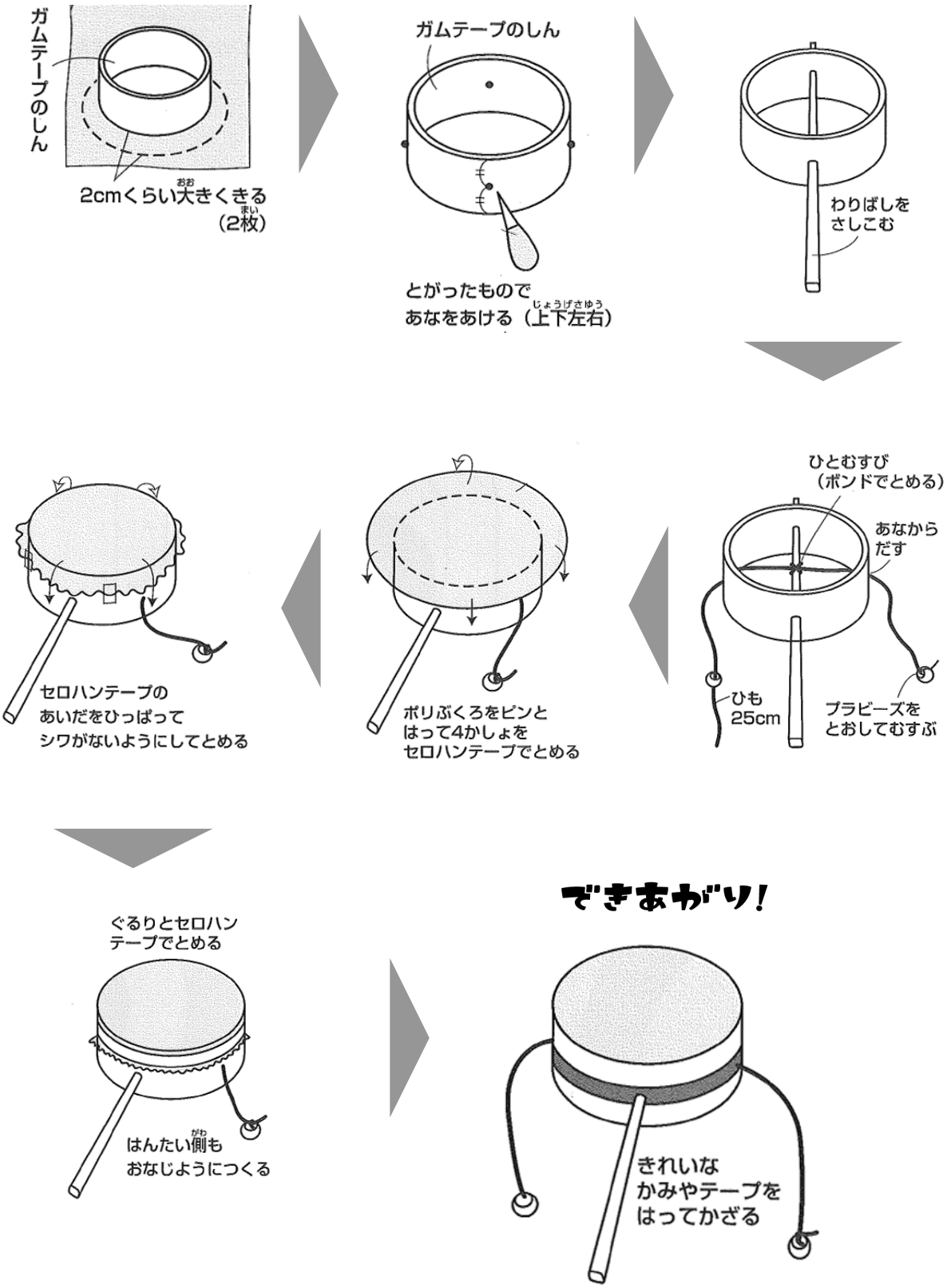
でんでん太鼓の出てくる楽しいお話をし、お話にあわせて太鼓を叩いてみましょう。

## 指導のポイント

・キリで穴を開けるので注意しましょう（低学年用にはあらかじめ穴を開けておく）。

・紙を湿らせすぎたり、ビーズを先につけたりすると紙が破れやすいので気をつけましょう。

# でんでん太鼓の作り方


ガムテープのしん
2cmくらい大きくきる
（2枚）
ガムテープのしん
とがったもので
あなをあける（上下左右）
わりばしを
さしこむ
ひとむすび
（ボンドでとめる）
あなから
だす
ひも
25cm
プラビーズを
とおしてむすぶ
ポリぶくろをピンと
はって4かしょを
セロハンテープでとめる
セロハンテープの
あいだをひっぱって
シワがないようにしてとめる
ぐるりとセロハン
テープでとめる
はんたい側も
おなじようにつくる
できあがり！
きれいな
かみやテープを
はってかざる

作って、あそぼ！

# お花が咲いた

井上 重義

推奨年齢： 制限は特になし

環境設定： 作業机

## 活動の概要

江戸時代の人気おもちゃ“御来迎”を、トイレットペーパーの芯・折り紙・割り箸など身近な素材を使って簡単に制作。小さな筒の中から出てくる折り紙の大きな花に子どもたちは大変驚き、喜びます。手作り伝承おもちゃですから、いろいろなものへの発展も見られます。

## ねらい

・自分で作ったおもちゃで遊ぶ体験をたくさん積んで欲しいと考えます。
・その中でいろいろな試行錯誤しながら成し遂げること、創意工夫することの喜びを知り、完成したときの達成感などを味わいます。
・まわりの友だちと協力したり、アドバイスをもらったりして、また、完成品を見せ合うなどといった交流の場面が期待できます。

▶指導のポイント

人に向けない、まわりの物に当てないなどの事前注意を伝え、ケガや事故のないよう取り組む姿勢を育みましょう。

## 準備物

材料：トイレットペーパーの芯、折り紙、割り箸、
破れにくい和紙（障子紙など）、描画材料など
道具：はさみ・木工用ボンド・糊・マジックなど

▶1人分材料目安

・トイレットペーパーの芯 1ヶ
・折り紙 6枚
・割り箸 1本
・破れにくい和紙（障子紙など）1．5×6cmを2枚

## プログラム開発の背景

本来「御来迎」は、下から出てくる竹ひごを押し上げると、筒の中から仏様が光を背負って現れるというもので、江戸時代初めの元禄から安永のころまで流行したおもちゃ。

今回の“お花が咲いた”はその原理を生かし、身近な材料を使って再現したもの。

## 展開内容 （所要時間約60分）

**作り方：**

1. 折り紙5枚をそれぞれ約1．5cm幅に折り畳んでいき(つづら折り)、糊でつなぐ。
2. つないだ折り紙の真ん中に、割り箸の先を2cm ほど木工用ボンドで貼りつけ、折り紙を畳む。
3. 割り箸と折り紙の部分を、2cm 幅の折り紙でしっかりと巻きつけてとめる。
4. これをトイレットペーパーの芯の中に入れ、上から出た部分をはさみで切り取る。

5. 筒から出して、折り紙の上部両端に幅1．5㎝、長さ6㎝ほどに切った和紙などの丈夫な紙を木工用ボンドでとめる。
6. 筒の中に再び入れて、両端の紙を木工用ボンドで筒にとめる。
7. 筒の外側に、折り紙を適当な幅に切って巻きつけたり、模様をつけたりして楽しい筒にする。これで完成。

**遊び方：**

割り箸を持って上に押し上げると、筒の中から大きな花が現れる。下におろすと筒の中に隠れる。

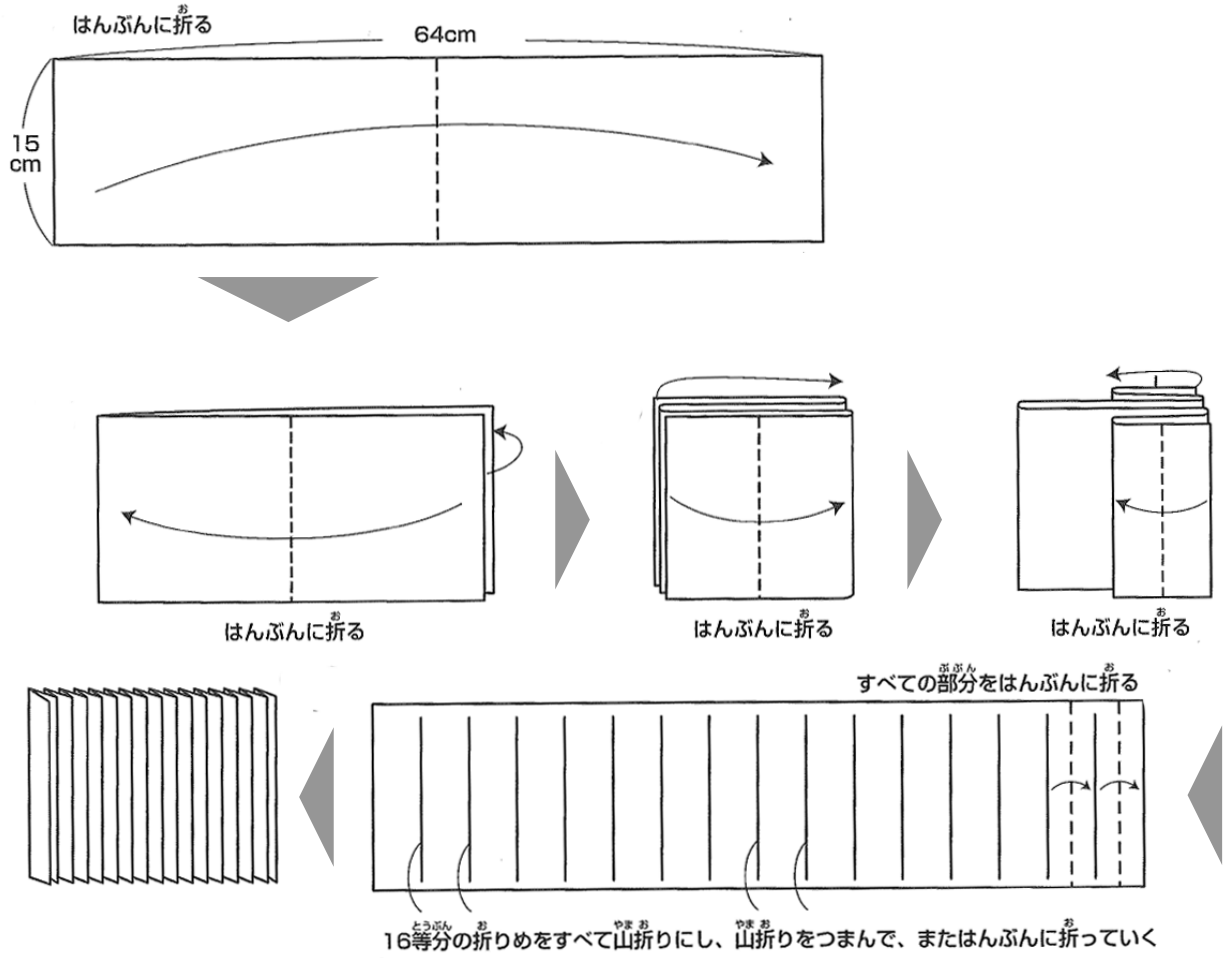
## 指導のポイント

・この伝承おもちゃの由来をごく簡単に説明してあげましょう。
・事前に制作しておいたいくつかのサンプルを見せて、制作意欲を高める工夫をしましょう。

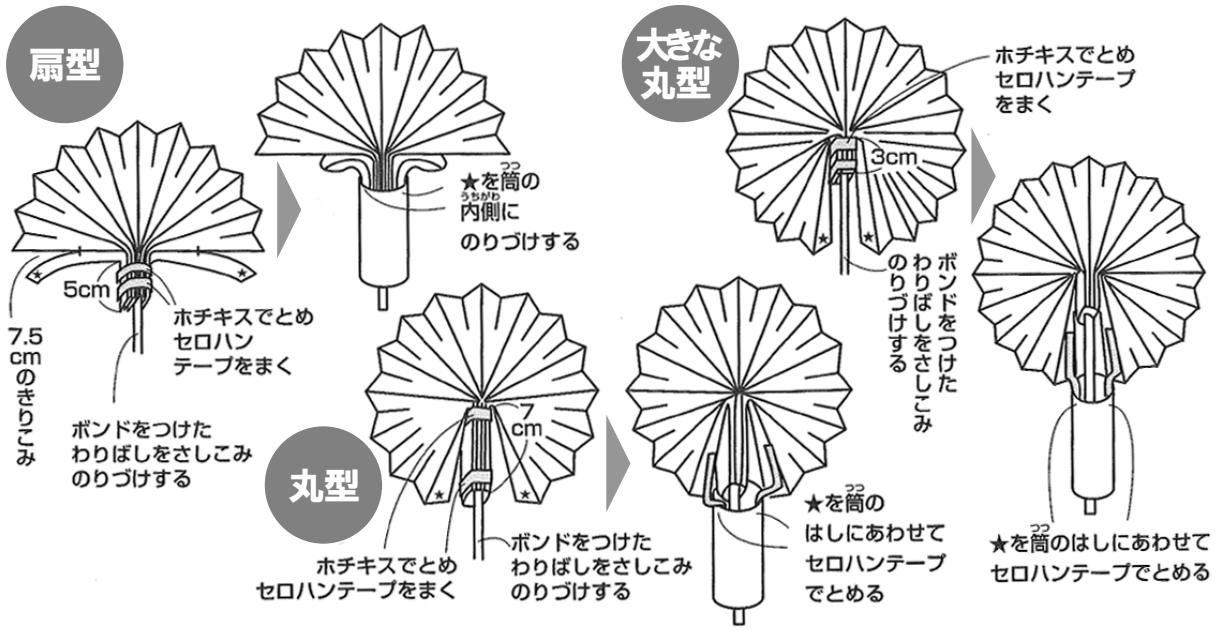
**▶遊びの発展**

真ん中にク孔雀の絵などを貼ると、孔雀が羽を広げたような動作を表現できる。

## 「お花が咲いた」の作り方




## 作り方いろいろ



作って、あそぼ！

# 体操人形

井上 重義

## 活動の概要

“体操人形”は世界中で広く遊ばれてきたおもちゃで、日本にも古くからあったとされています。各国で若干の違いはありますが、基本的には、H 型の上部に人形がつき、下部を握ると人形が跳ね上がったり回転したりといった動きをするものです。主に割り箸(木)を使った、動きのあるおもちゃです。

## ねらい

・既製のおもちゃとは違って、長い年月、世界中の子どもたちに遊ばれてきたおもちゃを作ることによって、伝統に触れて感慨を持って欲しいと考えました。

・友だちと協力して制作したり、完成品を見せ合うなどといった交流が出てきます。

## 準備物

材料： 割り箸、輪ゴム、凧糸、厚紙、針金、ストロー
アイスキャンディーの板棒（長さ9cm ほどのもの・厚紙でも可）

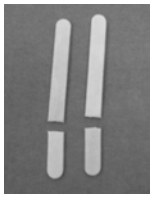
道具： はさみ、キリ、セロハンテープ、木工用ボンド
カラーペンなどの描画材料

## プログラム開発の背景

日本に古くからあった「体操人形」は竹をU字型に曲げて作るもので、諸外国のものはH型に木の棒を組んで作っていた。今回の作品は身近な素材を使って、より簡単に制作できるものである。

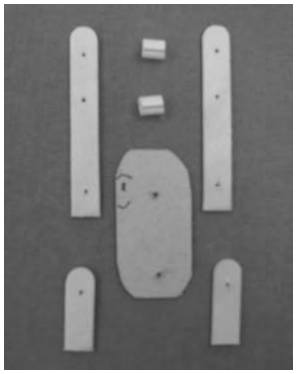
## 展開内容 （所要時間約60分）

1. アイスキャンディーの板棒2本を
1対2にハサミで切り、手と足を作る。



2. それぞれにキリで穴を開ける。
厚紙を切って胴を作る。顔や胴の模様などをカラーペンで描き、
手と足を止める穴を開ける。

厚紙が薄いときは2枚を貼り合わせる。角は少し丸くするとよい。



**推奨年齢： 制限は特になし**

**環境設定： 作業机**

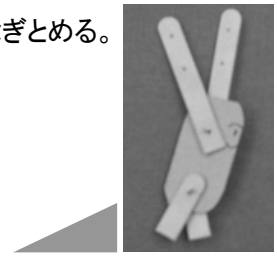
**▶指導のポイント**

人に向けない、まわりの物に当てないなどの事前注意を伝え、ケガや事故のないよう取り組む姿勢を育みましょう。

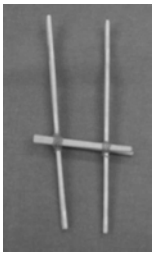
**▶1人分材料目安**

・割り箸 3膳
・輪ゴム4本
・アイスキャンディーの板棒 2本
（長さ9cmほどのもの・厚紙でも可）
・凧糸 約20cm
・厚紙 5×2．5cm
・針金
（細いもの、盆栽用のアルミの針金だと細工しやすい）
・ストロー

3. 針金か凧糸で、胴と手足をつなぎとめる。



4. 割りばし1膳を割り、長さ9cmほどに2本切る。
残りの割りばし2膳は、割れないようにセロハンテープを巻きつけたあと、太いほうに2か所キリで穴を開ける。
5. 割りばしを輪ゴムで組み立てて鉄棒を作る。輪ゴムを2本使って、伸ばしながらしっかり巻きつけてとめる。



割り箸それぞれの太い端側に上2ヶ所穴をあけておく

6. 割りばしの鉄棒を逆さにして、凧糸で鉄棒と人形をとめる。
・手の間の糸には、必ず5mmほどに切ったストローを通しておく。
・手がくっつかないようにする。
7. 鉄棒を起こし、鉄棒と人形の手の間の糸が×になった状態で糸を結ぶ。
・凧糸が必ず×になる状態で糸を結ぶこと。

**遊び方：**

鉄棒の下の方を握ると人形が上に跳びあがり、放すと下におりる。その動作をくり返すと、人形が回転したり、反転します。
最後に割り箸にカラーのマーカーで模様を描いて完成です。

## 指導のポイント

・『体操人形』は世界各国に伝わるおもちゃであること、それぞれの国の子どもたちが手作りして遊んできたことに思いをはせ、自分で制作し、改良したり、友だちと比べあうことの楽しさを伝えましょう。
・アイスキャンディーの板棒を切ったり、穴を開けるところなど低学年では難しい箇所もあるので、高学年の子がサポートできるような機会を作るようにしましょう。
・保護者も知っているおもちゃなので、親子イベントなどで制作するのもいいでしょう。

作って、あそぼ！

# 大口カッパは、くいしんぼ

水野 政雄

## 活動の概要

新聞紙を使って、丈夫で、大きな口で何でも食べてしまうカッパを作ります。

## ねらい

・普段見逃しがちな、しかも簡単に手に入る素材の大きさ、手軽さなどを生かしてダイナミックな作品を作ると共に、それを使って、自由で大胆な遊びを子どもたち自身が考え、遊びこみます。

・作品の基本形は低学年でも十分に作ることが出来ますが、より楽しい飾りを作るとか、カッパを使った遊びや短い劇などを創作するときは、高学年が力を発揮できます。

## 準備物

材料： 新聞紙　1 枚(頭部を作る)、半分(体を作る)
　　折り紙　黄色2枚・赤1・緑1枚
　　（目・口の中・頭のお皿を作る）

道具： 輪ゴム、セロハンテープ、のり、はさみ、描画材料など

## プログラム開発の背景

破れやすいといわれる新聞紙も、繊維の方向によっては引っ張りに非常に強い特質をもっている。これを利用して、ダイナミックな動きのある作品で、子どもたちに驚き、刺激を与えたい。

## 展開内容 （所要時間約60分）

1. カッパ(完成作品)を面白く見せる。
   ・丸めた紙やボールなどを飲み込ませ、吐き出させる。また小さな子の頭を加えさせたりも面白い。
   ・各部分をよく見せる。
2. 制作
   ・新聞紙で頭を作る。
   ・新聞紙で体を作る。
   ・目、頭のお皿などを作る。
3. “遊び”を考える
   ・どんな遊びに展開するか、みんなで話し合う。
   ・遊びの進行に必要であれば、小道具なども作る。

**推奨年齢： 制限は特になし**

＊人数が多い場合は、グループに分かれて遊ぶ。

**環境設定： 作業机、ゴミ箱**

・リーダー用に机1脚。
・ごみ箱（ごみが大量に出るので）
・リーダーは一人でもできる内容

**▶1人分材料目安**

・新聞紙： 1枚 ＋ 1/2枚
・折り紙： 黄色2枚、赤1枚、緑1枚

4．遊ぶ

高学年のリードで遊ぶ。

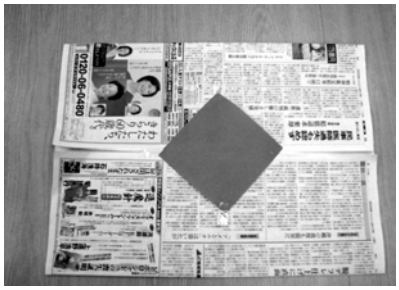
＊約45分で制作し、それを使っての遊びを考えさせる、実際に遊ぶ、で、合計約60分の活動と考えている。

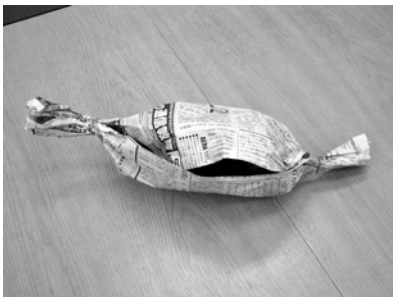
### 指導のポイント

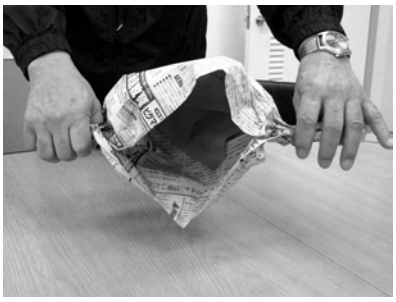
・この活動は誰にでも、どんなにモタモタした指導であっても、子どもたちには喜ばれます。しかし、最初の見せ方にはそれぞれが工夫と練習を重ねて、楽しく見せられるように努めましょう。

・活動中に子どもたちが羽目をはずすこともあるでしょうが、多少大目に見て心を開放させてあげましょう。

・押付けるのではなく、個性を発揮させて、それを褒めましょう。







できあがり！

作って、あそぼ！

# 紙コップザウルス

水野 政雄

推奨年齢： 制限は特になし

環境設定： 作業机

## 活動の概要

ストローと竹ひご、紙コップを使って、口がパカパカ動く恐竜を作ります。

## ねらい

・紙で立体を作ることは高学年でも難しいが、紙コップを利用して簡単に作れることを知ります。

・作った後、ほかの友だちに見せびらかしたり、家に持ち帰ったりして、さまざまな交流の場でリーディングボードを握ります。

・一つの作品からいろいろに発展させて、楽しい作品群ができることを理解します。

## 準備物

材料： 紙コップ、画用紙、
じゃばらのついた太いストローと細いストロー
シール（目玉用に黒と白 / ペンなどで描くことで代用してもよい）

道具： セロハンテープ、はさみ、ホチキスなど

▶1人分材料目安

・紙コップ 1個

・じゃばらのついた太いストロー :1本

・細いストロー： 2本

・画用紙 八つ切り＝1枚

・シール： 目玉用に黒と白、数枚
※ペンなどでの代用可

## プログラム開発の背景

子どもたちの大好きな恐竜を作ることは難しかったが、紙コップを利用することに思い至って、その独特の動きを再現できるようになりました。

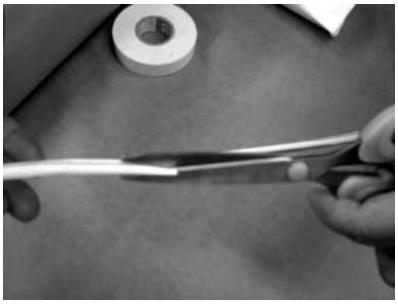
## 展開内容 （所要時間約60分）

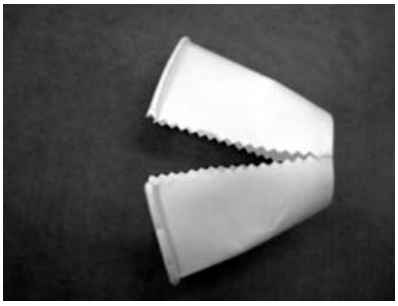
1. 細い2本のストローをつないで長くする。
2. 図のように、太いストローのじゃばらをのばし、上方の約3cm の半分部分を切り、折り曲げる。
3. 紙コップの口のほうから約3分の2ぐらいをつぶして折り目をつけ、その中心部を ピンキングバサミでコップの根元まで切込みを入れる。この切り込みに合わせて紙コップの底に折り目を入れる。上下のコップの先をホチキスで止めておく。
4. 細いストローの上部3cm ぐらいを折って、紙コップのつぶした線の上で、布テープでしっかり貼り付ける。
5. 太いストローの中に細いストローに入れて、コップの底の折り線に合わせて、折ったストローの先をしっかり貼り付ける。

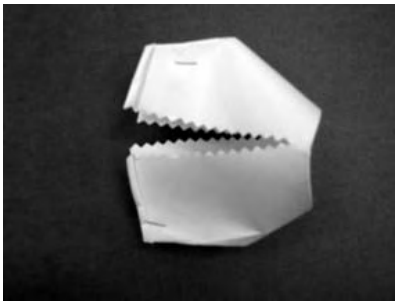
6. 細いストローを上下させると、コップの先が開閉することを確認しておく。
7. 紙コップを切って、恐竜の顔を作る。シールで目や涙を作って貼ったり、あるいは描いたりする。
8. 画用紙を2つ折りにして、体を作る。これを太いストローに貼って、恐竜が完成。

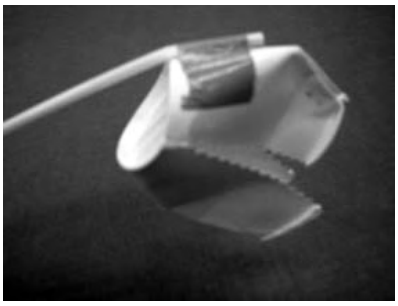
### 指導のポイント

・頭の切り方や、体の形の切り方で、いろいろな恐竜が表現できることを知らせ、2体目や3体目を作るときに自分独自の作品を作らせましょう。例えば、獅子の頭の形にすると、体はハンカチを巻くだけで獅子舞いになります。









できあがり!

作って、あそぼ！

# 新聞紙 手作りサッカーボール

水野 政雄

推奨年齢： 制限は特になし

環境設定： 作業机

（あればでよい）

## 活動の概要

破れやすいとか、弱いというイメージの強い新聞紙を使って帯を作り、それを使った骨組みのボールを作り、サッカーなどをして遊びます。新聞紙から立体的なボールができることを知ると共に、室内でも思いっきり蹴って遊べるサッカーを楽しみます。ほかにも遊びを考えていきます。

## ねらい

・素材の持つ長所を生かし、また弱点を補う方法を知り、身近にいくらでもある素材を使った楽しいおもちゃを作り、遊びことに興味を持てるようにします。

・制作過程の中で、ここはこうした方がいいなどといった試行錯誤や創意工夫することの喜び、完成したときの達成感などを味わう。

## 準備物

・新聞紙

・大きめの段ボール1個： ゴール用

・セロハンテープなど

▶1人分材料目安

・ 新聞紙 2～3枚

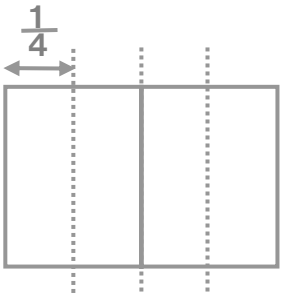
## プログラム開発の背景

新聞紙を丸めてボールにするのはよくあるが、骨組みで球形にするのは見たことがない。弾むことはないが、軽くて、思いっきり蹴ってもあまり飛ばない。壊れても作り直せばいいだけのこと。このボールで子どもたちがどんな遊びを考え出してくれるか楽しみである。

## 展開内容 （所要時間約60分）

ボール作り：

1. 新聞紙大判を1／4の大きさに切る。
2. 縦方向に半分ずつに4回折っていく。
3. 両端をセロハンテープでとめて輪を作り、つぶして細長くする。
   この輪を5つ作る。
4. 4つの輪を均等の角度に組み合わせ、上下をセロハンテープで固定する。同じ大きさの輪を4つとめると、歪みが出てくるが、許容範囲ということで、そのまま進める。



5.　4つの輪の真ん中を残りの輪でまとめ、セロハンテープでとめる。
　　ここにも歪みが出てくるが、均等に歪ませることでよしとする。

ゴール作り:

図のように、段ボール箱を斜めに 2 等分する。

遊び方:

サッカーのように両サイドにゴールを置き、2チームに分かれてゴールに入った得点数を競う。ルールはサッカーに準じる。

### 指導のポイント

・遊び込んでいく中で、年齢などに合わせてルールを改定していったり、全く違う遊びを考えたりしていくよう、見守ります。

・慣れてきたら、輪を作るときの歪みをどうしたら解消できるかなど課題を与えて、自分で解決していく方法も考えさせましょう。

できあがり!

作って、あそぼ！

# 新聞紙 手作り帽子＆バスケット

水野 政雄

推奨年齢： 制限は特になし

環境設定： 作業机

## 活動の概要

新聞紙を使って、等身大の手作りの帽子やバスケットを作ります。

## ねらい

新聞紙以外ではなかなかできない、等身大の紙工作で、作ったものを利用して遊びます。素材は簡単に手に入るので、いろいろなアレンジをしたり、同じ物を何個も作ってみんなで勢揃いしたり、いろいろな遊びに発展させます。

## 準備物

・新聞紙

## プログラム開発の背景

新聞紙は破れやすく弱い部分がある反面、切ったり丸めたりすることが容易で、手先を使いながらの大きな造形活動ができる利点があります。その特性を利用し、簡単なごっこ遊びに使えるかぶとや、実用的なバスケットに応用しました。

## 展開内容 （所要時間約60分）

かぶと:

1. 新聞紙を順に折る。
2. 裏、表に1枚ずつ折る。
3. 底を丸くする。
4. シールを貼る。

バスケット:

1. 上記の流れでかぶとを1つ作る。
2. 新聞紙を 1 回ごとに折りながら巻き取る。新聞紙の両端をかぶとの両端につける。

できあがり！

# 放課後活動プログラム
# ワークショップ

**●「自分でつくった野菜キャラクターで遊ぼう　−紙相撲で勝負」（児童向）**

講師：西岡直実　　場所：石川県小松市のしろ児童館

**●「ピクニックセットで遊ぼう」（指導者向）**

講師：瀬戸口清文、澤井雅志　　場所：石川県小松市公会堂

**●「ピクニックセットで遊ぼう」（児童向）**

講師：瀬戸口清文、澤井雅志　　場所：石川県小松市東部児童センター

**●「身近なものでおもちゃを作ろう」（児童向）**

講師：増田良子　　場所：千葉県四街道地区コミュニティセンター

**●「はてなパズル‘タングラム’であそぼ！（児童向）」**

講師：花輪充　　場所：東京都港区放課GO→あざぶ

児童対象

# 自分でつくった野菜キャラクターで遊ぼう

## ー 紙相撲で勝負 ー

西岡 直実 ＆ キャラキッズ

**ワークショップ概要：**

「家庭（身近）の食に興味を持つ」、「野菜の特徴を知る」ことを狙いとし、野菜のことを考えたり観察したりした後、自分だけの野菜キャラクターを作る。作ったキャラクターは、紙相撲にして対戦などして楽しむ。

開催日時 ： 2008年2月7日（木） 15：30～17：30
場　所 ： 石川県のしろ児童館（遊戯室）
指導講師 ： 西岡直実（キャラキッズ主宰）、
キャラキッズスタッフ
参 加 者 ： 児童約50名（1～3年生）、指導者15名

**展開内容**

### 1． キャラクターって何？

今日やることの説明のあとに、「キャラクターって何？」ゲームをします。身近な『おにぎり』がどうやったらキャラクターになるかな？

子どもたちが1個ずつ目や口などのパーツ加えていき、名前をつけて、家族を考えて、「おにぎりまん」というキャラクターになりました。

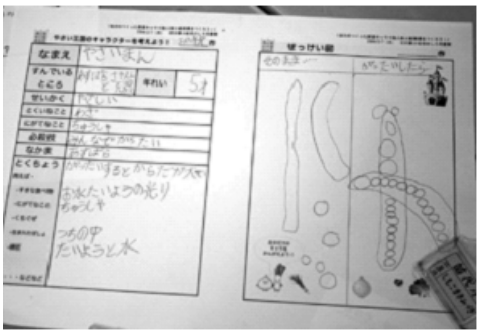
遊びながら、キャラクターの創り方を知りました。次は自分のキャラクターを創ろう！

### 2． 野菜を触ってみよう！

昨日食べた野菜を思い出しながら、実際に野菜を触ってみます。「さやえんどうの中身はどうなっているの？」普段意識してみることのない野菜の中身に興味津々です

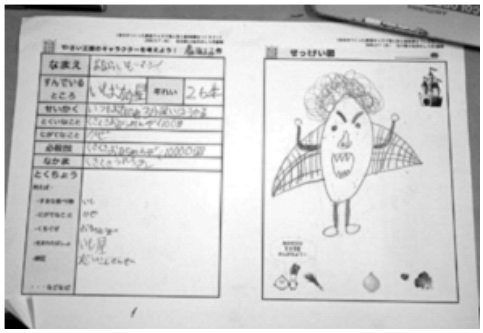
### 3． キャラクターを考えてみよう

ピーマン、アスパラガス、いろいろな野菜を観察しながらキャラクターを考えます。生まれた場所、得意技、家族、性格、それぞれに特徴があるキャラクターが生まれました。




▶さやえんどうをモチーフとした「やさいまん」
必殺技：みんなで合体

▶プログラム詳細
本誌 p.55参照



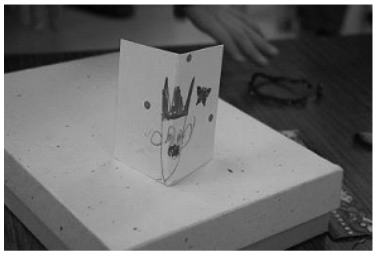
▶さつまいもをモチーフとした
「おならいもーまん」
師匠：だいこん先生

## 4. 紙相撲をつくろう！

画用紙に、自分のキャラクターを描き、紙相撲のコマを完成させます。「色を綺麗に塗ったほうが強い！」という声も聞こえてきて、みんなカラフルに仕上げていました。色のほかにもキラキラシールなどで飾り付けをしました。

## 5. 友達と対戦

いよいよ自分のコマを戦わせます。
「5人抜きで勝った！」と、何度も対戦する姿が印象的でした。



## 6. クロージング

「今日の夕ご飯のおかずにはいっている野菜をみつけて、
キャラクターをつくってみよう！」という声がけをし、
ワークショップは終了しました。

指導者対象

# ピクニックセットで遊ぼう

瀬戸口 清文　　澤井 雅志

**ワークショップ概要：**

身近な素材を使った運動遊びのプログラムに、実際に一参加者として指導者が加わるなかで、指導者にとって大事なことを体感していくことが狙い。指導者のモチベーションによって、子どもたちがより遊びに興味をもったり楽しんだりできることを伝える。

開催日時　：2008年2月8日（金）　10：00～12：00
場　　所　：石川県小松市公会堂
指導講師　：瀬戸口清文先生、澤井雅志先生
参 加 者　：指導者40名

▶プログラム詳細
本誌37ページ以降参照

**展開内容**

## 1．輪になろう

まず最初に、みんなで手をつないで輪になり、少し身体を動かしました。それとともに、参加者の緊張がほぐれていきました。

「なぜ仲良くなれたと思う？」と瀬戸口先生。「大事なことはサークル（円）になったこと。顔が“見える-見られる-意識が高まる”こと」「放課後クラブでは、教材力よりも人間力。“子どもをその気にさせる”ことが大切。理屈は後にして、まずみなさんが楽しんでみましょう」

## 2．紙コップエクササイズ

2つの紙コップを使って以下のような様々な遊びをしました。

- 片方の紙コップでもう一方の紙コップをキャッチする。
- “てるてるボール（坊主）”を作って、投げたものを紙コップでキャッチする。
- 2人組になって、相手の投げた“てるてるボール”を紙コップでキャッチする。

## 3．紙皿でエクササイズ

紙皿と割り箸で作ったラケットと、てるてるボールで羽根つきをしました。「あんたがった どっこさ♪　ひごさ　ひごどこさ♪」と、歌にあわせて「さ」の音で相手に羽を渡します。

その後は、折り紙をつかってよくはねるハネを手作り。このハネは、ゆっくりと落ちてくるので、ラケットで打つだけでなく、投げたハネを指でキャッチしたり、と遊びのバリエーションが広がります。

## 4. リトルコーンエクササイズ

・ ２つのリトルコーンを使って、片方で投げたコーンをもう片方でキャッチする。
・ 片方のコーンを足に入れ、コーンを下から蹴り上げたものを、手に持ったもう片方のコーンでキャッチする。

**ここで瀬戸口先生からは…**

・ これらの遊びによって、手と目の協応性を養うことができる
・ 指導者のモチベーションが子どもにも伝わり、憧れがエネルギーになるため、指導者自らが取り組む姿勢が大切、というお話がありました。

## 5. ビニール袋エクササイズ

２つのビニール袋を用意する。

・ １つのビニール袋の中に、もう一方を丸めて入れ、ボールのように蹴ってその下をくぐる.。
・ ２つの袋をジャグリングのように投げて取る。

歌にあわせ、複数の人で隣の人のビニール袋を受け取る遊びもしました。

「もしもしかめよ　かめさんよ （隣に移動）
　せかいのうちで　おまえほど （隣に移動） ～♪」

終わりは、全員の輪で挑戦！自然に「せーの」という掛け声がかかり、歌もより一層大きな声で歌いました。

**最後に、瀬戸口先生から指導者の皆さんへ…**

「子どもにとって指導者のモチベーションは大事。これからもいろいろなものに興味をもって、自分自身を高めていけるようにしましょう！」
というメッセージを頂きました。

児童対象

# ピクニックセットで遊ぼう

瀬戸口 清文　　澤井 雅志

**ワークショップ概要：**

身近な素材を使った運動遊び、エクササイズの展開。身体を動かしながら、創意工夫をする心を養う。

開催日時　：2008年2月8日（金）　15：00～17：00
場　　所　：東部児童センター
指導講師　：瀬戸口清文先生、澤井雅志先生
参 加 者　：30名（1年生～3年生）

▶プログラム詳細
本誌37ページ参照

**展開内容**

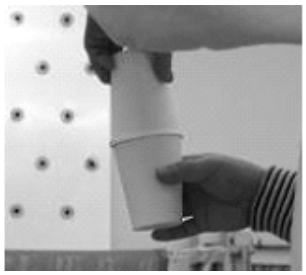
## 1.　身体を動かしてみよう

「これからすごいことするよ！みんなにはできるかな～」
　　と瀬戸口先生。足と手を閉じて開いて、順番に飛びます。
「簡単！できるよ！」
「すごいね！じゃあこれはできるかな？」
　　手と足の動きが逆になったり、右手と左手も違う動きになったりして、子どもたちは驚いています。
「今日はこれは長くやらないけど、練習してみてね！」

## 2.　紙コップエクササイズ

2つの紙コップをつかって以下のような様々な遊びをしました。

- 片方の紙コップでもう一方の紙コップをキャッチする。
- “てるてるボール”をつくって、投げたものを紙コップでキャッチする。
- 2人組になって、相手の投げた“てるてるボール”を紙コップでキャッチする。



## 3.　紙皿でエクササイズ

紙皿と割り箸でつくったラケットと、てるてるボールで羽根つきをしました。その後、同じ道具を使って、床においた“てるてるボール”を前に進める競争を行いました。みんな、スタートラインで真剣な表情をしています。

紙皿ラケット：

## 4.　リトルコーンエクササイズ

・　2つのリトルコーンを使って、片方で投げたコーンをもう片方でキャッチする。

・　片方のコーンを足に入れ、下から蹴り上げたコーンをもう片方でキャッチする。

## 5. 飛行船をとばそう

折り紙で、簡単でよく飛ぶ飛行船を作りました。

ティッシュペーパーで尾ひれをつけると、飛んでいるときにとてもきれいです。高い所に登って、飛ばす子もいました。

## 6. ビニール袋エクササイズ

指導者の方にも参加頂き、上から落とす袋を床につくまえにとるゲームや、落ちてくる袋に当たらないように身体を転がして避けるゲームを行いました。

最後は、たくさんの人数で歌にあわせて、複数の人で隣の人のビニール袋を受け取る遊びもしました。

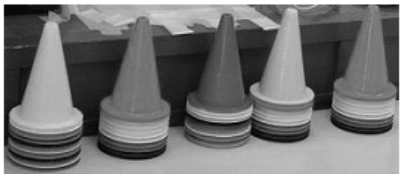
「もしもしかめよ　かめさんよ　（隣に移動）
せかいのうちで　おまえほど　（隣に移動）　〜♪」

## 全体を通じて

東部児童センターは、トランポリンや一輪車なども活発に活動として行っており、子どもの身体能力が高いという傾向が見られました。そのため、今回のエクササイズについても、どんどん順応して、自分たちの遊びとして楽しむ様子が見られました。

身体を動かしながら、「どうやったらうまくいくだろう？」と子どもたちが自分たちで考え・工夫をして試行錯誤するということは、遊びの中でとても大切な要素と言えるでしょう。

▶プログラム詳細
本誌35ページ参照



児童対象

# 身近なものでおもちゃを作ろう

増田 良子

**ワークショップ概要：**

普段生活のなかで手軽に手に入る材料を使っておもちゃを作り、その過程、完成したおもちゃで家族や友人と楽しめるプログラム展開である。また同時にいくつかの手作りおもちゃのメニューを用意することで、異年齢の子どもたちや、学校の授業が終わってバラバラな時間帯に集まる子どもたちが参加しやすい環境づくりとなっている。

開催日時　：2008年2月20日（水）　15：00−17：00
場　　所　：四街道地区コミュニティセンター
指導講師　：増田良子先生
参 加 者　：20名
（1年生〜3年生、保護者と幼児）

▶プログラム詳細
本誌113ページ（びっくり箱）、115ページ（ロケット）、120ページ（万華鏡）参照

## 展開内容

### 1．びっくり箱をつくってみよう

「この前バレンタインデーだったでしょ。
だからチョコレートをプレゼントします」と増田先生。

手にはかわいい箱やお菓子の箱を持っています。子どもたちが箱を開けると、中からたくさん何かが飛び出してきました。子どもたちはびっくり！

「びっくりした？これ、つくってみたい？」

聞くと、子どもたちは「うん！」。「他の友達をびっくりさせたい」という声も。びっくり箱の中身の正体は牛乳パックでできていました。

実制作では、子どもたちは、たくさんつなげてカラフルな色を塗ったり、自分の身長よりも長いものをつくって「大蛇」と名付けたり、それぞれ工夫をしてオリジナルのびっくり箱を作っていました。

## 2. 万華鏡を作ろう

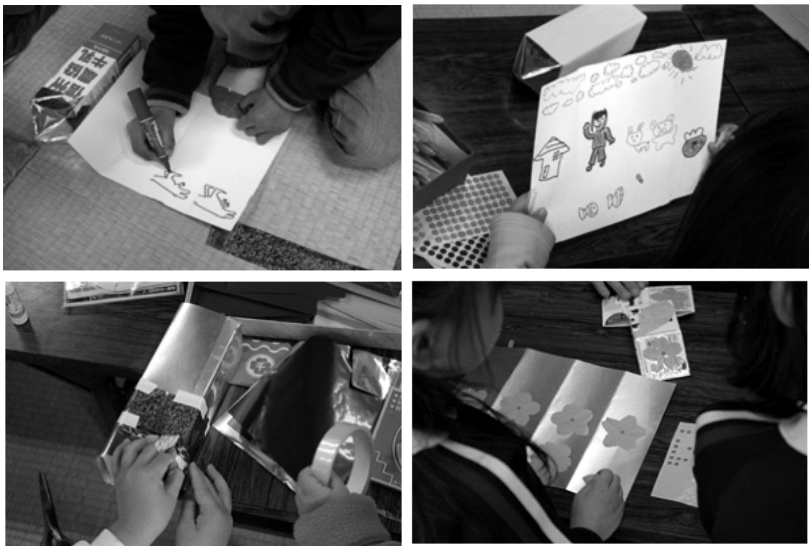
次に、万華鏡を作ります。

「この中をのぞいてみてね」と増田先生。

子どもたちが中を覗き込むと、

魚やハートのとても美しい模様が見えました。

実制作のなかで、子どもたちは、思い思いに絵を描いたり、筒の周りを折り紙やテープで飾り付けたり、自由な発想で万華鏡を完成させることができました。



最後に、増田先生が用意してくれた新聞紙のロケットをもって、外で飛ばしました。

会場には、小学生の子どもたちだけでなく、小さな妹や弟も遊びにきていましたが、びっくり箱の中身を手でとばして遊んだり、年齢を問わず楽しむことができました。

児童対象

# はてなパズル‘タングラム’であそぼ！

花輪　充

**ワークショップ概要：**

子どもたちのモチベーションや集中力を高めたり、コミュニケーションを円滑にし、協同作業をしやすくする、ウォーミングアッププログラムを行った後、タングラムを使ったプログラムを実施した。タングラムのプログラムは、グループでの取り組みとし、仲間と試行錯誤しながら問題解決を図っていくことを狙いとした。

開催日時　：2008年2月26日（火）15：15～16：30
場　　所　：港区麻布小学校3階　放課 GO あざぶ教室
指導講師　：花輪充先生
参 加 者　：20名（1年生～4年生）

**展開内容**

## 1．マジカルペーパーブレーン

最初に、花輪先生が紙を折りながら言いました。

「これから何かつくります。わかったら言ってね」

すると、子どもたちは「紙飛行機？」

「そう、では、どういう飛び方をすると思う？」と聞くと

「まっすぐ！」「戻ってくる」「頭にぶつかる」

色々な答えがでてきました。その中で、「戻ってくる」と答えた子どもに人差し指で紙飛行機を触ってもらい「人間パワー」を注入しました。紙飛行機を投げると…、見事！戻ってきてキャッチできました。

戻ってきた理由を子どもたちに推測してもらうと

「羽が曲がってるから」「強く飛ばしていないから」など、色いろな答えが出てきました。

「そうだね、いいこと言うね」と、

先生は一人一人の答えに頷いています。では、正解は？

先生はすぐには教えてくれませんでした。先生は、これができるようになるまで3年かかったそうです。

「この紙飛行機を置いていくから、

分解したりしながら秘密を探ってください」

さて、次に来るときまでにみんなはできるようになっているかな？

▶プログラム詳細
本誌25ページ参照

［当日のタイムスケジュール］

15：15　マジカルペーパーブレーン
15：30　あつまってマンパワー
　　トン！トン！トン？、
　　ドライブしよう！
16：00　はてなパズル‘タングラム’
　　であそぼ！
17：00　終了

## 2. あつまってマンパワー

「たてやほい！」「すわれやほい！」

「すわらないやほい！」「片足で立つやほい！」

掛け声にあわせて、みんな一生懸命動きます。

「わらえやほい！」「まわれやほい！」

「かべをたっちするやほい！」

「四角いものにたっちするやほい！」

教室中をかけまわっていました。

## 3. トン！トン！トン？、パワーゲーム

先生　／　子ども　／　先生

「トントントン」「何の音？」「急いで座る音！」

（みんな、急いで座ります）

「トントントン」「何の音？」「ゆっくり立ち上がる音」

（みんな、スローモーション）

「トントントン」「何の音？」「やめって言うまで回る音」

（みんな、目がまわりそう）

「トントントン」「何の音？」「かたいっぽうの足で立つ音」

（ふらふらしてます）

「トントントン」「何の音？」「２人組で座る音」

（急いでペアを探しています）

「トントントン」「何の音？」「背中をあわせる音」（・・・？）

「おしくらまんじゅう、始め！！」（みんな、負けじと押し合います）

「トントントン」「何の音？」「握手をして楽しいことを発見する音」

（握手をした手をぶんぶん振る子たち、握手をしたまま
ぐるぐる回る子たち、とみんな思い思いの動きをしています）

その後も、「力比べをする音」「力比べをしてよかったよ！と相手に思わせる音」「握手をしてすごくドキドキした、と思わせる音」など、いろんな内容で子どもたちは自分らしい表現をしていました。

## 4. ドライブしよう！

５人組になって、一人ひとり番号を決めます。

「３番がドライバー」と言われたら、３番の子が方向を調節して、他の車（５人組）とぶつからないように、舵取りをします。事故にならないようにするには、みんなの協力が必要！暴走しているタイヤはないかな？

## 5. はてなパズル ‘タングラム’ であそぼ！

まず、先生が色々な形を見せてくれました。

「これな～んだ？」

「窓」「ひげ！」「三角」「パンツ！」子どもたちからは色々な答えが返ってきます。

「今日は、このピースを全て組み合わせて、四角や三角などを作ります。まずは、正方形！」

子どもたちは7人組に分かれて、相談をはじめます。色々並べてみますが、なかなかうまくいきません。黒板にはってある正方形に、ピースをあわせて確認する子もいます。

先生が少しずつヒントをくれました。

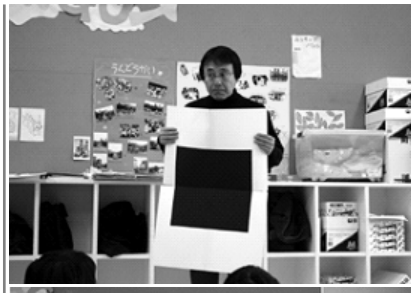
「一番大きな三角形は・・・仲良しです」

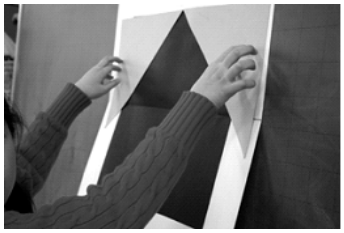
「四角は・・・大きな三角形のうえに、ちょっこり座っています」

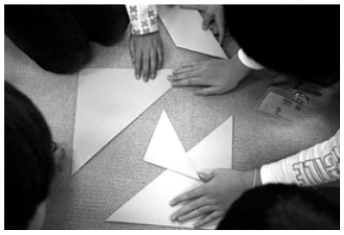
「線と線は・・・行き止まりはありません」

すると、「できた！」という歓声が各グループから上がってきました。みんな、とても嬉しそうです。

正方形ができたら、三角形、長方形とどんどん色々なパターンに挑戦ができます。

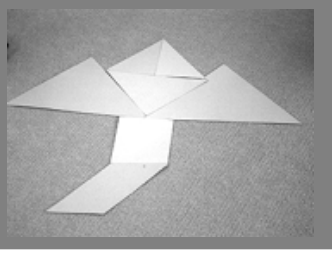






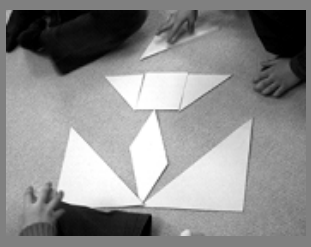
▶ 自分たちのグループで、オリジナルのマークも作ってみました。

エンゼルフィッシュマーク



放課 GO→！マーク

お花マーク



先生から、今日使ったこのピースが子どもたちにプレゼントされました。

「同じ場所から見ていたら分からなくても、別なところから見てみたら、分かることもあります。紙飛行機もそうです。ピースも紙飛行機も、置いていきますので、みんなでじっくり分解してやってみてください」

# 放課後活動のこれから

- 横浜市（YCCAS）
  コミュニティークラブアフタースクールの活動
- 放課後子ども教室の展望

阿部 進

- 放課後の効果的な活動プログラム

瀬戸口 清文

- 放課後活動への視点・想い

花輪 充

# 横浜市コミュニティークラブアフタースクール（YCCAS）の活動

阿部 進

## 1．学び方を学ぶ教室をつくる

横浜市では子どもたちの放課後をどうするかで平成 5 年から市立小学校内の施設（空き教室）を利用する「はまっ子ふれあいスクール事業」を開始しました。当初は退職した校長・先生たちで構成・運営されました。程なく、行き詰まりました。子どもたちが来なくなったのです。原因は「学校からまた学校に来た感じ」つまり開放感がない事でした。平成 13 年に市内全小学校（約 360 校）にふれあいスクールが開設、それを期に運営を NPO に委託するという形になりました。その後、働くお母さんの急増などの変化、子どもたちの放課後の学習活動の保障などへの対応が急務となり、平成 15 年に放課後の子ども育成施策の在り方について「放課後児童育成施策の方向性について～子どもたちの放課後ルネッサンス～」という提言書が出され「はまっ子ふれあいスクール」「放課後キッズクラブ」などの子どもたちの活動の整備がすすめられています。

こうしたことを受けて私たち NPO 教育支援協会は横浜市の放課後事業に協力するため「はまっ子ふれあいスクール」「放課後キッズクラブ」の運営を受託すると共に、はまっ子やキッズを運営する他の団体と協力して各種のプログラムの提供をすすめています。この放課後活動を「横浜市コミュニティークラブアフタースクール（YCCAS）」と呼び、私が校長を務めています。

はまっ子ふれあいスクール、放課後キッズクラブは両者とも、子どもの生活圏である学校施設を利用し、全ての子どもを対象とした事業です。子どもたちの抱えている学力問題、人間関係、規範意識の育成など多様な問題は学校や家庭では解決できないという考えから「地域の教育力」に期待がかかっていることを受けて進められている事業です。しかし、実際に市民の手で子どもを育てることのできる「地域」というものが存在するかが疑問です。この声に応えるのが NPO としての教育支援協会の役割であり、YCCAC の使命だと考えているのです。

## 2. いま求められている地域教育のモデル

現在の「はまっ子」や「キッズ」はいろいろな課題を抱えています。「小学校高学年の参加が少ない」ということです。高学年生は「学習的プログラム」を希望しているのが多い。ともすると、放課後は「あそびが中心」という傾向があります。習い事や学習塾に比べて魅力がないということが主因だとわかりました。保護者もそれを強く望んでいるという事もありました。そこで、学習・活動プログラムを強化する方針を YCCAS では考え出しました。まず、三つの目標を立てました。

① 1日1時間以上の家庭学習の習慣を育て、自分で学習する子に育てます。

② 「ふしぎだな」「おもしろいな」と2つ以上のやりたいことをもった子に育てます。

③ 人に負けない自信を持った教科が1つ以上ある子に育てます。

そしてプログラムは「イングリッシュ・おもしろサイエンス・らくだセルフラーニング（算数）・素読暗唱・漢字はかせ・ものづくり・ネイチャーキッズ（自然体験）・だがしや楽校となっています。このうち私が担当しているのが、おもしろサイエンス（科学実験）と、漢字はかせ（音訓両読み小学校で習う1006字を習得した者に全国ランキングで「はかせ」の称号を与える）」と、だがしや楽校です。

また、YCCASでは、「学校で給食、放課後はおやつ」と考え、「おやつ」を出します。但し無料ではありません。KABAGON券という1円、5円、10円のYCCASのお金で買うのです。これは放課後を過ごす子どもに 3 つの仕事を定義し、「勉強すること、あ

そぶ（あそばせること）、手伝い（家、地域も）をすること。仕事には報償がでる。」としています。原則としてサイエンスのプログラムの参加では1コース1KABA～2KABA、「漢字はかせ」のプログラムでは全漢字習得で85KABAもらえます。それで駄菓子コーナーで駄菓子、文房具が買えるのです。自分の稼いだお金でおやつや消しゴム、エンピツ、ノートまで買える。ちょっとしたキャリア教育と思っています。

このプログラム（駄菓子屋を含めて）を他のはまっ子、キッズクラブにも提供しています。家庭や地域の商店街でもKABAGON券を活用しているところがあります。家庭の手伝いやしつけ、奉仕活動に広く使われています。毎年秋休み（横浜は2期制）には、横浜だがしや楽校が2日間開かれ市内全域から子どもたちが集まってきます。（平成19年度は20万人中7万人の子どもたちが参加して楽しみました。）

## 放課後子ども教室の展望

阿部 進

### 1．高学年が満足するプログラム作り

どこも悩みは「高学年が来ない。来ても定着しない」ということです。高学年を子ども扱いしてはいけないのです。お兄ちゃん、お姉ちゃんとして責任をもって中・低学年の面倒をみてよ、とまかせるのです。放課後活動での役割をハッキリさせてあげるのです。責任感を持たせ、リーダーとして教育することです。その見返りとしては、学校では習わない、放課後子ども教室だけで学べることを学ぶ機会があります。

放課後活動でのプログラムが、国語・算数・理科・社会…と、全教科に及べば素晴らしいけれど、欲張らないことです。一つでよい。あなたの好きな教科があればそれを前面に出すのです。例えば詩、俳句、川柳といったものが好きであれば、五・七・五の俳句、芭蕉・一茶・正岡子規の違いを教える。この三人は明らかに俳句に対する姿勢がそれぞれにありますが、学校では教えてくれないものです。またあなたが算数が好きであれば、関孝和の和算術が今話題になっている「インド式算術」であることが分かるはずです。それを子どもたちに教えるのもいい。理科が好きだったら私みたいに「おもしろサイエンス」をやればいいのです。そして「どうしてこうなるのか？」と、答えを出す必要は必ずしもありません。

学校の授業はどうしても「答えは一つ」というところへ導かなければなりません。100点にどこまで迫れるかで多くの評価が決まってしまいます。そこで出来る子どもとそうでない子ども、と順位が確定してしまいます。放課後子ども教室には順位も凝り固まった目標もありません。「やった、おもしろい」でよいのです。放課後活動は、学校の授業とはまた違った子どもの可能性を伸ばす場に成りうるのです。

## 2．わたしも考える、キミもな

お互いに興味をもって取り組めること、おもしろいことをやってみる、というのも大切です。例えば、「ジンギスカン(チンギス・カーン)と、源義経を中国風に音読みにしたゲンギケイは、何となく似ているのではないか」。こんな風説がまことしやかに流れていました。私が小学校4年生の頃、1940年代の頃のことです。みんなヒソヒソと先生に聞こえない声で興奮して話し合ったことを思い出します。歴史好きなあなたなら子どもとそれを一緒に調べてみよう、というのでもよいのです。答えが3つも4つもある、そんな面白さが引き出せるのが放課後活動です。

## 3．放課後活動の先生を増やす

「答えを出さなくてよいなら私にもできる」そんな人が集まって欲しい、簡単な活動のレシピで子どもと一緒に成長発達できる大人の参加が欲しいのです。いまボランティアを有償へという動きが主流になってきたり、官が動き民間の企業や個人も変わってきました。子どもたちの教育環境を良くすることが、効果はすぐに出ないが確実にこの国の有り様に大きく貢献するに違いないという確信が生まれ始めたのです。我が子だけを見る視点から他の子も見る、子どもを持っていなくても知恵を出しましょうという大人たちの動きを大きくしていく、子どもは知恵とお金をかけて育てましょう、という大合唱を作り出す、これが大切だと思います。

阿部　進（あべ すすむ）

昭和5年（1930年）、東京生まれ。横浜市立平沼小、県立神奈川工業高校(機械科)、横浜国大(学芸学部特別教員養成課程修了)と横浜で学び育ち、現在も横浜在住(金沢区)。川崎市内の小学校教諭を13年間務めた後、社会科の教科書編集員、各種民間教育運動の事務局、特殊教育『手をつなぐ親の会』の結成などに携わる。その後、㈱阿部進事務所、㈱創造教育センターを設立。麻布にて科学実験教室、山梨県南都留郡忍野村を拠点に野生学園を主宰するほか、教育全般で活躍。全国子ども居場所放課後教室問題協議会会長、横浜子ども支援協議会会長、横浜だがしや楽校校長、NPO 教育支援協会顧問。

# 放課後の効果的な活動プログラム

瀬戸口 清文

**指導者向けワークショップ**

数年ぶりと言う大雪にもかかわらず、小松市公会堂大講堂には各施設から「放課後児童クラブ」の指導員たちが集まって来られました。指導員の方々は全員女性で、放課後児童の母親くらいの年齢の方が多いようです

開催時間の10時になると、私の手拍子と掛け声のリズムで、最初は緊張気味だった指導員の方々も、輪になって集まってきました。皆で手をつなぎスキンシップしながらウォーミングアップ、心も身体も緊張から解き放たれてきたようです。

「なぜ、すぐに仲良くなれたと思いますか？」

「そう、輪になったこと！」

「大事なことは、みんながお互いの顔を見合わせたこと！」

「見る、見られることによって、お互いに意識を高め合ってきました。」

「さあ、プログラムを始めましょう！皆さん自身が楽しんで下さいね。」

指導者にとって大事なことは、このように言葉や動きの緩急・強弱などで、子どもたちをその気にさせるための表現力です。力量やセンスなどに個人差はありますが、身につけるためのレッスンは必要だと思います。

そこで、レッスンを受ける人がいるのか、レッスンしてあげる人がいるのかを考えて、『表現らくちんプログラム』のようなものが必要ではないでしょうか。これは、子どもたちの気持ちをほぐし、モチベーションをあげるためのプログラムで、その後どのようなプログラムを実施するにあたっても効果的です。また、多くの指導員が女性という、

その適性を活かした点も兼ね添えてあげると良いでしょう。

この後、身近な素材を使ったプログラムを実演しました。名づけて“ピクニックセットで遊ぼう！”。素材は、紙コップ、紙皿、割りばし、ティッシュ、そしてレジ袋です。

その様子は「ワークショップ報告」に記載されていますが、大事なことは、身近な素材でも充分に、「子どもをその気にさせることができる」（＝子どもの遊び心を駆り立てる）ということです。どんなに高価な道具や教材（＝「教材力」）よりも、子どもたちと正面から向き合う指導員の力量（＝「人間力」）が大事になってくると思います。まずは指導員の方々自身が‘きゃっきゃ！きゃっきゃ！’と、子どものように楽しむことができること。そして、子どもたちと向き合うときは、自分自身のモチベーションをあげておくことが大事です。その結果、子どもたちの目に楽しさが映り、エネルギーとなって伝わっていくでしょう。

午後からは、会場を東部児童センターに移動して、実際に放課後クラブに訪れた児童（以後、「放課後児童」と称す）と一緒に、澤井雅志先生と息を合わせて、プログラムを実践してみました。午前中のワークショップに参加された指導員の方々も集まって来られました。こちらも「ワークショップ報告」で詳しく記載されています。

東部児童センターの放課後児童は、運動に興味を持ち、能力としても高い子どもたち（この児童センターの特徴として、運動に関するプログラムを多く取り入れている）が集まったこともあって、今回実践したプログラムへの理解や反応は良すぎたと考えた方が良いと思います。つまり、プログラムへの反応が充分でない子どもたちがいたときに、どう対処していくのかも検討が必要で、指導者として更なる力量が問われてくるものだと言えます。

午前中に小松市公会堂で行われた指導員向けヒアリング・ワークショップ、引き続き午後から、東部児

童センターで行われた放課後児童を交えたワークショップにおいて、放課後児童を対象に実施した「ピクニックセットで遊ぼう！」のプログラムを実演してみました。そこで、子どもたちの集中力、喜々として取り組む姿を目の前にして、参加された指導員の方々の表情には、何かを感じ取った様子が伺えました。

**放課後プログラムの今後の展開**

**1．指導者の資質の向上**

今回のヒアリング・ワークショップを行った感触から考えてみると、子どもたちにどんなプログラムを提供するかという以前に、大人自らに「楽しむ力」があるかどうか、「楽しむ力」は「楽しませる力」「楽しみ合う力」に他なりません。と同時に、子どもたちのやる気を引き出すパフォーマンス力も大事な要素です。

このようなことを考えていく上でも、今回のような研修を根気強く継続的に啓蒙していくことは、とても重要であると言えるでしょう。

**2．魅力的なプログラムの開発**

「考える、または考え合う」プログラム（＝協調性、共感性等を養う）。「気づくと夢中に走っていた」といったプログラム（＝絶対走量の向上～体力の向上）。つまりそれが、「提案力」と「教材力」によるものと考えると、楽しく、且つ、夢中に取り組めるプログラムの提案はとても大事なことだと思います。

**3．放課後からの発信**

今回の様子は、学校体育の時間のあり方の提示としても参考になるのではないでしょうか。つまり学校の先生方にみてもらいたいとの想いも正直なところあります。と同時に、学校での学習を振り返り、深める時間としての視点も見逃せません。だからこそ、学校との連携も重要だと考えます。

**4．今後の展開として**

今後このような指導員向けのプログラムを積極的に仕掛けるのか、それともプログラムを考える指導員の主体性を第一に考えるのかを考えていかなければいけないと思います。

また、「あそび」のカテゴリー別プログラムを提示することは必要だと思いますが、その前に、「放課後プログラムに何を期待するのか」、例えば、コミュニティ不足を解消することなのか、共働き家庭への何らかの支援として必要なのか等々、何れにしても、これらのプログラムは、ピンポイントの目的としては達成されるかもしれませんが、果たして本質的な部分の改善になるのでしょうか。今一度振り返って、とことん討議をし、より役に立つプログラムの開発と指導者の育成に向けて考えていきたいと思います。

瀬戸口 清文 （せとぐち きよふみ）

昭和49年から62年まで、NHKテレビ「おかあさんといっしょ」の体操のお兄さんとして活躍。現在は大妻女子大学で准教授を務める傍ら、日本遊育研究所主宰として、全国でファミリーコンサートや健康フェスティバルを企画・演出すると共に、運動遊びを研究。母娘向け講演・講習に全国多数出請。運動遊びをはじめ、親子体操・手話ソングなどの音楽リズム教材を多数制作。

# 放課後活動への視点・想い

花輪 充

**子どもの多面的な能力を**
**開花させる機会の拡充**

平成19年度よりスタートした「放課後子どもプラン」は、文科省の「放課後子ども教室推進事業」と厚労省の「放課後児童健全育成事業」を一体的あるいは連携させたものであります。数年前まで児童館における児童健全育成事業に関わって来た者として、この取り組みは歓迎すべきものです。なぜなら、子どもたちにとって慣れ親しんだフィールドで多面的な能力を開花させる機会が保障されるからです。

子どもたちの中には小学校生活の中で能力を十分に発揮できなくとも、それ以外のフィールド、例えば課外活動等で類まれな力を発揮している者もいます。今後、小学校の空き教室などを拠点として、それらの活動が行なえるようになれば、当人にとって好ましいことであるだけでなく、周囲からの理解や認知度があがることは言うまでもありません。そのことが、学校生活へのやる気や自信へと繋がっていってくれれば理想的でしょう。

また、「放課後活動」では多様な子どもたちと交流がもてることも大きな学習機会です。ともすれば一人の世界に篭りやすい現代っ子にとってみれば、年齢の違う、学校も違う、経験値も違う相手との交流はまさに異文化交流に匹敵するでしょう。

一方、グラウンドやホール等を広く使って遊べることも子どもにとっては有益なことです。アスレチックのフィールドとししかイメージしてなかった校庭が、まったくちがった自己実現の場になることもあるかもしれません。授業では取組めない様々なものづくりや、作業等に没頭できることもあるでしょうし、先生から投げかられたことのない課題に、とことん取組むことだってできるのです。

当然、いろいろなゲストとの出会いもあるでしょう。手品師や演奏家、舞踊家や科学者、陶芸家やスポーツ選手、服飾デザイナーやパティシエなど、数えたら切がありません。そうした専門家と出会うことで、子どもたちは学校教育では味わえないリアルな人間力を目にするでしょうし、それが彼らの好奇心と探究心の根幹となっていくことも考えられます。

**地域の人々と交流できる場所としての重要性**

そうした中、忘れてならないのが、地域社会の方々との交流です。このことは今の時代とても大きな意味をもってきます。

昨今指摘されていることに、「子どもを取り巻く家庭や地域の教育力の低下」があげられますが、自分らがどのような環境と伝統の中で生活をしているかといった意識はますます希薄化しており、そのことが生活規範の低下や、郷土愛の薄れ、さらには凶悪事件の発生に影をおとしていることは紛れもない事実でしょう。すなわち、地域の方々との接触の機会をふんだんに盛り込むは、自らのアイデンティティーを育む大事な機会となることでしょう。このことは、放課後活動の核といえることかもしれません。

**子どもたちの自発的取り組みを大事にする**

さて、全国の事例に目を通して感じたことは、プログラムの内容が大人主導のイベントに傾倒していることです。見方をかえれば、子どもを飽きさせないように練られたプログラムといってもいいでしょう。確かに、放課後のひと時、子どもたちの安全を見守り、楽しませ満足させてあげることは大切なことです。しかしながら、子どもたちが自発的に取組める、子どもが自分たちのこだわりと問題意識によって継続、発展させられる機会もふんだんになくてはいけないでしょう。

そのためには、放課後活動といったもの空き教室

での取り組み、と捉えないで、広義に解釈してはいかがでしょう。例えば、行政や様々な福祉機関と結託してみては。また例えば、公園の整備（ベンチやテーブルの製作）や、環境整備（町内の美化、ガーデニング）などは、すぐにでも出来ることかもしれません。また、パフォーマンス（お芝居、合唱、ダンス等）の実演などは、多くの施設引く手あまたのはずですし、そうしたことを話し合ったり、企画したりすることそのものが、放課後の子どもたちにとって必要な人間力育成のための核であることは言うまでもありません。

**指導者に求められるプロデューサー的役割**

ではその指導者の存在を考えてみましょう。真っ先にあげられるのが、地場で活躍されている様々な職種の方々でしょう。ともすると見過ごしてしまうような地域の息遣いをそれらの方々の手ほどきによって体感させることは、今日もっとも必要とされることであり、子どもたちにとっても実に新鮮かつ有益なことでしょう。

また、アーティストの方々にも登場していただき、俳優たちならば、舞台装置を作ったり、小道具を作ったりする経験を生かして、子どもたちに具体的なものづくりの醍醐味や魅力を体感させてもらいましょう。また、話す、動く、といった日常的な表現から演じるといった表現技術にいたるまで、専門的な見地から指導をいただくことも興味深いものかもしれません。音楽家であれ、美術家であれ、そのことは同じです。日常生活の中では見聞きできない、思いや情熱を子どもたちの心中に熱く届けてくれるでしょう。

そう考えると、放課後活動のリーダーというのは、それらのプロデュースを含めて考えられる存在でありたいですね。

子どもの傍らに陣取り、子どもの様子を伺い、彼らの問いかけに受け答えすることも大切なことですが、そこに固執するだけでなくて、もっと野心的に子どもたちが求めているテーマを探求し、学校教育の成果が奔放に活かせる場の提供者としての意識と存在感を高めていってもらいたいものです。

花輪 充 （はなわ みつる）

東京家政大学准教授。遊育研究所「素劇舎」研究員。劇作家・演出家。児童劇に幼児教育の現場で培った経験を生かし、子どもたちに大いに表現の喜びを体験してもらう活動を続けている。

# おわりに

次代を担う子どもたちにとって、「家庭」と「学校」との‘間’（＝繋がり）にある「放課後」には、現代社会の様々な視点や課題が見付けやすい場所であると考えられます。しかし、「教育基本法」の中で地域社会の関わりとともに、「放課後」の位置づけも明確になり、当然その責務も求められることになりました。 今回の「放課後活動支援モデル事業」を通して、連携する3つの市区のほか、様々な地域の放課後を取材させて頂きました。その中で感じ得たことは、「放課後子どもプラン」の施行に当たり、各地域の関わり方に大きな差異があることに加え、子どもを取り巻く環境や地域文化の厚みなど、均一的な方策が講じ得ないこともわかりました。キッズエクスプレス21では、「放課後の効果的なプログラム」という命題を頂戴し、先駆的なプログラムづくりから取りかかろうとしました。しかし前述しましたように、次第に各地の現場の状況がわかってくると、「放課後活動」の場と機会を有効的に運営するための手立てや環境づくりに向けたプログラムの必要性を感じてきました。今回、ワークショップで試行した「ウォーミングアッププログラム」や、プログラムを組み合わせた「プログラミング」の手法がそれに相当します。

皆様が手にして頂いている、本書『放課後活動プログラム集』には、放課後活動で活用できる、様々なジャンルの基本的なプログラムを中心に取り揃えてあります。また、3つの地域で行った「ワークショップ報告」の中では、具体的なプログラムの取り組み方の紹介や、キッズエクスプレス21が特に注視していきたい、「放課後活動」の場と機会を有効的に活用いただくためのプログラムも紹介してあります。

今回、本誌で紹介しきれないプログラムのバリエーションや取り組み事例等に関しては、キッズエクスプレス21のホームページで紹介していきたいと考えています。また、皆様の現場におけるプログラムの活用方法や地域連携の取り組みなどを、順次紹介していきたいと思っております。（http://houkago.or.jp/）

今回、この事業を通してご協力頂きました、東京都港区・千葉県四街道市・石川県小松市をはじめ、取材や見学等に応じて頂きました各市区町村の方々に厚く御礼申し上げるとともに、今後の「放課後子どもプラン」の施行に当たりまして、次代を担う子どもたちのために、より一層のご支援・ご尽力をお願いしたいと思います。

NPO法人キッズエクスプレス21実行委員会

# 寄稿者

| | |
|---|---|
| 相澤　菜穂子 | 食育料理教室あいね主宰　管理栄養士 |
| 阿部　進 | 全国子ども居場所放課後教室問題協議会会長<br>横浜子ども支援協議会会長　横浜だがしや楽校校長<br>NPO教育支援協会顧問 |
| 井上　重義 | 日本玩具博物館館長 |
| 河合　勝 | 愛知江南短期大学教授 |
| 島本　一男 | 子どもの文化研究所所員　保育園園長 |
| 瀬戸口　清文 | 大妻女子大学准教授　日本遊育研究所主宰 |
| 竹井　史 | 富山大学教授 |
| 西岡　直実 | キャラキッズ主宰 |
| 花輪　充 | 東京家政大学准教授<br>遊育研究所「素劇舎」研究員　劇作家・演出家 |
| 増田　良子 | 千葉女子専門学校校長 |
| 水野　政雄 | 心の森ミュージアム遊童館館長 |
| 渡辺　美佐子 | 日本ボッチャ協会常務理事 |

（50音順,、敬称略）

平成19年度 文部科学省「総合的な放課後対策推進のための調査研究」事業

放課後あそぼ！ **放課後活動プログラム集**

平成20年2月 発行

発行人 竹井 純

編集・発行 NPO法人キッズエクスプレス21実行委員会

KID'S EXPRESS 21

〒104－0042 東京都中央区入船3－2－7 第2明治ビル 6階

TEL 03－3553－1935 FAX 03－3553－1922

http://kids21.gr.jp/